

談 話 室

私の受けた一般教育

山下 智恵子

教養部時代の講義内容については、ほとんど忘れてしまっている。思い出すことのできるのは、断片的なことからで、例えば、日本国憲法の時間に話題になったアルカポネの裁判のこととか、「愛の哲学」、 「結婚年齢の調査統計処理」などで、前後の脈絡のつかないまま頭に浮んでくる。

そのようなものの中で、ある種のいたみを伴って思い出されるのは、公衆衛生学の一部で聴いた「被爆の医学」だ。

九州で育ったために、昭和20年8月6日の広島原爆投下については、透明で平板な一枚のスチール写真をみるような印象しかなかった。

入学式の後、友人と市内観光し、広島城、縮景園、百メートル通り、元宇品公園、比治山、宮島などととも、平和公園、平和記念館、原爆資料館も巡って歩いた。原爆資料館では、飴のようになったビン、瓦、変色しボロボロになった布切れ、ガラスの破片で傷つき血を流し、焼けただけれた皮膚をひきずる人形、どの前に立っても、おどろおどろしさに息をのんだ。しかし、一たび屋外に出れば、市井の雑踏。時間が経つにつれて、しだいに興奮はうすらいでいった。私にとっては間接的な経験にすぎなかった。

公衆衛生学の講義は、大きな階段教室で行われた大人数授業だった。担当の田中正

四教授は、医学部から、毎週この講義のために教養部まで出向かれていた。「被爆の医学」といった講義は、——晴れであった——という当日の天候からはいり、原爆投下後、広島赤十字病院の医師によって、地下室に保存してあったX線フィルムがすべて感光していたことから核爆弾であったらしいと推定された事実及び、その後の被災者の治療に当たった医師の体験、調査結果からのデータを紹介したものだったと思う。

〇〇キュリー 被爆——嘔吐、下痢

〇〇キュリー ——火傷、脱毛

⋮

〇〇キュリー ——即死

被爆線量の増加に伴って、確実に人体組織の破壊が増し、死に到る。しかも、その後遺症は、被爆後20数年を経過したその当時でさえも、血液ガンである白血病の罹患率が高いというような形であらわれているなど。

田中教授は、被爆の事実と、その人体への影響を、淡々とした口調で語った。

わずか数時間の講義だったと思う。資料館での見聞、市内あちこちに見られる慰霊碑、理学部裏面の風化したレンガ、学友の大声で叫ぶ「ノーモア・ヒロシマ」、ひそやかな精霊流し、短時間の私の貧しい体験が、地理的な広がり、時間的な経過をも

って整理できたと思う。そして、一瞬の閃光のもと、熱線と放射線の束が、人を死に至らしめた因果関係が、私自身の脳裏に怒

りを込めた痛みを伴って刻まれたように思う。

一般教育と私

渡 辺 節 夫

時のたつのは早いもので、香川大学に来て、もう4年近くがたってしまった。ここに来て間もなくの頃、この大学について一番印象的だったことは、一般教育についての議論が実に熱心になされていて、日常会話でもよく“一般教育”という言葉を目にするのであった。4年もたつと、なぜ、こんなに一般教育ということが話題にのぼるのか、微妙で複雑怪奇な事情がそれとなくわかってきて、もう余り気にもとめなくなったが、しかし、自分自身が現に担当している科目という意味ではもちろん気にとめている。気にとめているというより気にとめることを余儀なくされているという方が正確だろう。つまり、細かい点まで気にとめ過ぎても、とめ過ぎることがないほど、私には苦手な、苦痛な教育なのである。

先日、大津で日教組の全国教育研究集会というのがあり、一般教育の内容的な位置づけをめぐる議論が沸騰していた。要は、専門の基礎教育という意味以外にどのような意味があるのか、専門教育とは全く別個の一般教育という独自の教育内容があるのかということであったと思う。それに関係していろいろな意見が出されたが、一般教育とは何か、よく考えてみると意外と難しいものだとつくづく感じたのである。私が、一般教育の教育が苦手なもの、一般

教育というものの内容についてのあるべきイメージが曖昧なところに原因があるのではないかと思いはじめた。

こう書いてくると、おまえは一般教育の存在意義について否定的な輩であるとレッテルをはられそうだが、少なくとも、自分が受けた一般教育には大いに感謝しているし、その思い出も多い。もっと正確にいうと、一般教育を受けていた頃の人的環境あるいは雰囲気に対して感謝しているし、思い出も多いということかも知れない。ということの中には、もちろん、一般教育を授けて下さった先生方がすばらしかったことも含まれている。

特に、歴史学のスタッフは、大学院時代の仲間からうらやましがられるほど、日本史、東洋史、西洋史いづれも、すばらしかった。歴史の勉強をしようか、フランス文学をなめてみようかと迷っていた私に、歴史に進むべきだとアドバイスしてくれたのは、これらの先生方の講義であった。国文学も、自然科学概論も、フランス語も、中国語もおもしろかった。自分の講義などは全然比べものにならないと失望したり、私も年季を積み重ねれば、同じようになれるだろうと勝手な希望的観測をして、自分をなぐさめたりしている。

そんなわけで、69年の大学“紛争”の頃

の“高校教育のくり返し一般教育フンサイ”というスローガンは、どうも私には、ピンとこなかった。私は、私の講義を受けている学生の多くのように年間の殆り以上も平気で自主休講することはなかった。殆りの科目を一回も休まなかったように記憶している。とにかく、何もかもおもしろかった。

一般教育時代が楽しかったと記憶されている理由は、その他に、友達、といってもも男友達ばかりであるが、との関係があると思う。どういふわけか、私のまわりには、講義の時には一番前に陣取って、講義を聞きながら首を横に振ったり、講義の途中でも平気で質問を浴びせたりして、先生を悩ます元気のいい、目立つ友達が4、5人いた。彼等は、浮いた話の方とは縁が遠かったが、何かにつけて活発であった。彼等は、都会育ちの浪人組であった。田舎育ちでトツ弁の私などは、何の反論もできず、狭苦しい下宿に帰っては、ふがいない自分がつくづく、いやになった。しかし、同時に、彼等の議論を聞いているうちに何か学問というもののポイントらしきものが、わ

かってきたような気がした。もちろん、早熟な——というより正常な——彼等が口にする偉い思想家のことや、その時々重大な政治問題の断片的な知識も耳に入ってきた。こうした複式学級の下級生のような居心地の悪さが逆に刺激になって、一年生の終り頃には思索的なことの楽しさがわかり始めたし、日記にも詩のマネゴトや思索のカケラが書けるようになった。同時に、天と地ほどかけ離れていた悪友たちとの距離がぐんと縮まったのが手にとるようにわかって、実に愉快であった。

一般教育が高校までの教育の歪みの解消を一つの任務としているといわれるとき、その意味は、恐らく、私が友達の力を借りて、やっと、なんとかたどりつけた、自分で思索し、自分で感じとる習慣を教育体系を通して効果的に定着させようということだと思っている。しかし、理論的にはわかって、このことはなかなか難かしいことのように思われる。だが、少なくとも、私に一般教育を授けて下さった先生方と同じ役割を、恩返しの意味でも、果さなければならぬと考えている。

教育について

稲 富 健一郎

ロンドンで、おもしろいものを見かけた。小さな子供にひもをつけて犬のように歩かせているのである。時には2頭立の馬のように、子供を二人同時に連れているのを見たこともある。われわれの感覚からすると、人間を動物のようにあつかっているからちょっと変な気持ちがするけれど、私は

それがとても気に入っていた。大学の学生にきくと、Baby Harness というのだそう。Harness とは普通「馬具」と訳されている。これは実に合理的にできている。お母さんはうしろで子供がころびそうになったり、危険なところに近づいたらひもをひいて子供を守る。子供に自由を与えなが

ら、しかもちゃんと守りみちびいてゆくことができる。私はこれが教育の原型であろうと思う。子供をべたべた甘やかさずかといって放任せず、一人立ちできるようにさせる。

歴史的にみてもそうだが、イギリスは教育に熱心で実際にお金をかけているようである。学生は両親の収入に反比例して grant と呼ばれる奨学金をもらっている。アルバイトをする学生はいない。トットリアルがあるから学生はあそんでばかりはおれない。日本のようにアルバイトで得た金を遊びにつかう、そして勉強をしないというのは、もってのほかだ。学生は勉強せねばならない。イギリスでは、成人の教育もすすんでいる。学校を卒業しても、教育をうけられる。年間の学費は、3千円位だ。ヒース首相だったか、私がロンドンを去る頃、学位をとったということが話題になっていた。日本のように、大学を出たら勉強をしないという事情とは大ちがひ。おじいさんも、おばあさんも、勉強するのを楽しんでいる。もちろん国民全部がそうだといっているのではないが。

日本とのこの違いはどこから生れてくるのだろうか。大きな原因の一つは、教育がなっていないことがあげられるだろう。大学生になっても成人になっても、一人立ちできていない。めだかのように国民が、右往左往する。一方に走り出したら、一人のこらずそっちへ走り出す。就職に有利なことだけで大学に来る。だからいやでも、目をつぶってがんばり通す、学問を楽しむということがない。何か利益をもたらすもの、自分の得になるものための手段にしてしまっ、そのものを楽しまない。報酬を求める。報酬のないものには興味をもたず、目先きの得にならないものには目

もくれない。日本において、今一番大切なのは、知識をこれでもかこれでもかとおこむことをやめて、精神的に一人立ちできる人を育てることではなからうか。このままこの状態がつづいてゆけば、日本人の生活は、精神的にますます活力を欠いてゆき、死に直面するだろう。それもよいかも知れぬ。行きつくところまでゆくのも、良いかげんな対応策を講ずるよりは良いだろう。しかし教育というのは、何と大切なものだろう。日本は建物も精神もすべて安物のように思われてくる。

私に部屋をかしてくれていたヘップワス氏は、次のようにいていた。イギリス政府は実際馬鹿だ、外国人を教育するために巨額の金を使っているのだから。それほど英語教育にしても、設備・方法共しっかりしている。ブリティッシュ・カウンシルのラングエジ・インスティテュートもその一つ。そこで感じたことは次のとおり。まず訳読というのは、英語のテキストを使った日本語の勉強ではなからうか。日本語に英語をひき込んで理解しようとする。漢文でも返り点をうったりして、日本語になおしてから理解するようで、伝統的なやり方だと思うけれど、どうもそれでは外国語を理解できないのではなからうかと思う。日本語をはなれて英語の中に入って理解しようとしなければ。それは発音のことについても言える。日本語のアイウエオの音と英語の音がどう対応するかで日本語の発音で英語を読む。実は発音も日本語の発音と全く違う。全然ちがう有機体として認識しなければならない。スタートがまちがっている。私のそこの先生も、日本人の英語ほど聞きとれないものはないといっていた。私は以前聞き話す能力を軽視していた。それを必要と考えるようになったのは二つの理由に

よる。読み書く能力を発展させるためと、コミュニケーションのため。英語を聞きとる場合訳読のようにひっくりかえしたり、逆行しては、理解できない。したがって聞くことにより、そのまま理解できるようになり、読みも早くかつ完全にできるようになるであろうし、書く場合も同様のことがいえるだろう。後者に関しては、英語は世界語になってきている。日本は今まで

受身一方だったが、これからは、日本の考えることを世界に表現して世界の人々の考えていることを知る必要がある。世界はますますせまくなり、日本が生きてゆくためにはどうしても世界の人々との対話が必要となるだろう。そのためには、実際に授業をどのようにやれば良いかが問題だ。暗中摸索。頭が痛いことである。

「真っ赤なうそ」小考

小林賢次

「真っ赤なうそ」「真っ赤な偽り」などという表現がある。「真っ赤な^{まこともの}贋物」をも含めて、被修飾語はきわめて限定されており、一種の慣用句となっていると言えよう。

では、赤いうそとは、一体どのようなうそなのか。うそがなぜ赤いのか。——このように問いを発するならば、だれしも説明に苦しむのではなかろうか。同種の表現としては、「赤の他人」があり、あるいは「黄色い声」のような場合がある（「青二才」などはやや性格が異なるか）。中世から近世にかけてのものでは、「真っ黒に」の形で、〈夢中になって。一途に。〉の意に用いた次のような例が加えられる。

○官位ヲモハガセラレイデワカナワヌト、マックロニ (maccuroni) ウツタエラレタ (天草本平家物語・一)

このような色彩語以外にも、「寒い声」のように、本来の感覚と異なる結びつけの用法があり、これらは、文芸批評用語でシネステジア (synaesthesia) とよばれる

ものにあたるようである(註)。詩などにおける文芸上の技巧的な手法は別として、日常語の中で、このようなシネステジアの用法が、どの程度用いられてきたか、また、現に用いられているか、興味を引かれるところである。

ところで、ここで問題とする「真っ赤なうそ」の類であるが、これは、本来は色彩の赤とは無関係であったのではないかと思われるのである。この点について、いささかの考察を試みることにしたい。

「真っ赤なうそ」の類の初出は、近世中期頃のものである。『日本国語大辞典』(小学館)では、まっか〔真赤〕の項目の③に「まじりけなく、全くそのものであるさま。まっかい。」のブランチを立て、

○地女は真実も真実、真赤な真実なるべき(随筆・独寝・下82)〈1724年〉

○まっかなうそをつひてたきつける(黄表紙・御存商売物・下)〈1782年〉

○似ても似つかぬ真赤(マッカ)な贋物(歌舞伎・彩入御伽草・序幕)

の例をあげている。第2・第3例は、現行の用法と同一であるが、第1例はやや異なる用法となっている。第1例に関しては、日本古典文学大系本の頭注（中村幸彦氏）に「赤心をこめての真実」とあるように、漢語「赤心」（＝まごころ、誠意）を念頭において、これを和語化したものであろう。「真っ赤なうそ」の類とは正反対の概念と結びつくものであり、別に扱うべきものと思われる。

ここで問題となるのは、マッカナと並んでマッカイナという語形がしばしば見られることである。意味的には、マッカイナはマッカナとほぼ重なるようであり、

○こちらのすみに真かいな物が見ゆるが
あれば何じゃ（虎寛本狂言・萩大名）
〈大日本国語辞典所引〉

○ハテ、さるの尻は、まっかいな（軽口
独狂言）〈1765年〉

○まっかいに夕日は西に申の尻西のかし
らの夏のすゝ風（万代狂歌集・上）
〈1812年〉

のような「真っ赤」の意の例が見られる。マッカイナは形容動詞マッカナと形容詞マッカイ（あるいはアカイ）との混淆（contamination）によって生じたものと一応解釈できよう。マッカイの語形は、接頭語マツ（真）とアカイとが融合してしまっているため、マックロイやマッシュロイなどと違って、形容詞としては安定しにくく、そのため、形容詞を含んだ形のマッカイナが、一時的にせよ、マッカナと肩を並べて用いられたのではなからうか。ただし、形容詞マッカイも存在しており、次の例などは「真っ赤いうそ」の例として注意される。

○墨に彩色く緑青や丹の真赤い嘘でござ
る（今源氏六十帖・上）〈1688年〉

さて、このような例に対して、

○箱の内なは、こりやまっかいな賈物
（韓人漢文手管始・一）〈1789年〉

のような場合、はたして「真っ赤」の意かどうか疑問が持たれ、むしろ、中世以来のマッカイサマとの関連を重視すべきだと思われる。上記の例については、日本古典文学大系本の頭注（浦山政雄・松崎仁氏）にも〈「まっかいさまな」の略。全く違った。〉という見解が示されている。

マッカイサマは、中世の抄物等にはしばしば見られるものであり、

○願トハマッカイサマニウチカヘサヤウ
ナルコトヲ云。（略）マツサカサマニ
願サウナレトモ（東山御文庫本論語抄
・四）

○間色ヲハ上衣ニモ（シ）、五色ヲハ裳ニ
ンテハ、マッカイサマナソ（古活字版
毛詩抄・二）

のように、〈正反対、逆、さかさま〉の意に用いられている。さらにさかのぼるならば、マッカイサマはマッカヘサマ（真返様）の転じたものであり、この点に関しては諸辞典等でも異論はないようである。接頭語のマツ（真）を取ったカヘサマ・カイサマの例も、中世・近世を通じて用いられている。カヘサマ（返様）の例は中古以来のものであり（宇津保物語・枕草子に例がある。『岩波古語辞典』に説くごとく、カヘサマはカヘンサマの音変化としてとらえられる。）、むしろ、カヘサマに接頭語としてのマツ（真）を添えて、マッカヘサマ・マッカイサマという語形を成立させたものと言えよう。中世におけるカヘサマ・カイサマの例としては、管見では次のようなものがある。

○逆櫓をたてうとも、かへさまるをたて
うとも、殿原の船には百ぢやう千ぢや

うもたて給へ。義経はもとの櫓で候はん（平家物語・十一・逆櫓）

○若い者モ高官ニアルホドニ是ニ依テ叔伯ハカイサマニシタゾ（古活字版毛詩抄・四）

以上考察してきたように、マッカイサマナの形が定着し、多用されるに至った結果、「マツカイサマ」という語構成の意識が弱まって、「マッカイ+サマ」という意識で受け取られるようになり、そのため、接尾語的なサマを脱落させる場合が生じたものと思われる。

このようにして生じたマッカイナ<=正反対な、逆な、まったく異なる>は、語形の類似から「真っ赤いな」として受け取られるようになり、「マッカイナ贖物」は、やがて「真っ赤な贖物」の形で定着するに至ったものであろう。

ちなみに、このように見てくると、「赤の他人」の場合も、その成立については、やはり同様の観点から考察する必要があるであろう。すなわち、

○兵庫の頭、坂田の公平には顔まっかいな他人にて」（雪女五枚羽子板・もんさく系図<1705年>（日本国語大辞典所引）

のような例の存在は、この場合もやはり、本来赤色とは無関係であったのではないかという推測を可能にするものであろう。

以上、語史考証としてはまったく不十分なものであり、確定的なことを言うためには、さらに資料の収集を続けなければならないが、一つの仮説として提示してみた。言語の変化には、さまざまな要因がからみあってはたらいっており、一つの語を取り上げても、限りなく問題が広がっていくことを痛感するのである。個々の現象の追求・解明を、国語史の大きな流れの中にかに位置づけていくか、道は遠い。

（注）小西甚一「鴨の声ほのかに白し一芭蕉句分析批評の試み一」（文学31巻8号，昭和38）による。

（1975，12，25）

ある日の対談

森 本 国 臣

小先生「先生、今年は各地で大雪のようですが、スキーは如何ですか。」

大先生「今年はダメじゃ。骨折した足がまだよく直っておらん。足の中にまだ金属の棒が埋め込んである。」

小先生「それはどうもお気の毒なことです。先生のようなベテランが骨折とは信じられませんでしたよ。」

大先生「油断大敵じゃ」

小先生「先生は結局六か月御入院だったわけですね、その間にずいぶん読書なさったと聞いておりますが。」

大先生「いや、たいして読まなかったよ。読書家の君とは違うよ。大体ね、本というものは信じ過ぎると大変なことになる。本に書いてあるから、これはこうだと主張するのが君のいつもの論法だが。」

小先生「それについては自戒していま

す。ショーペンハウアーも警告していますよ。」

大先生「ほう、また始まった。」

小先生「まあ、そういじめないで下さい。」

大先生「これは真面目な話だ。文字の使用、さらに後のグーテンベルクの活版印刷術が文化を発展させてきたのは事実だ。世界中の本を集めれば巨大な知識の山ができあがる。しかし、こんなものはバベルの塔だよ。」

小先生「めちゃくちゃを仰っては困ります。図書館の数と蔵書数はその国の文化のパロメーターですから。」

大先生「君、そんなつまらぬ常識にとらわれてはいかん。ワシがここで考察せんとするのは書物の根本問題だ。書物のおかげで人間は多少利口になったかもしれぬが、その反面、書物のおかげで戦争を始めたと言えなくもない。ヨーロッパでは聖書のおかげで宗教戦争が起ったのだ。」

小先生「暴論ですね。」

大先生「暴論なものか。話を一步進めるが驚いてはいけない。教育というものも人間を利口にしが、反面どれだけ人間を墮落させてきたか知れない。ここで言う教育とは学校教育のことだ。学校教育には良いのと悪いのとあると言う奴がいるかもしれぬが、ワシに言わせれば、良い学校教育というものは存在しない。」

小先生「大胆な説ですね。」

大先生「人間が人間を導く。これはできないことだ。学校という狭い温室の中でモヤシが沢山のモヤシをこしらえ上げる。盲人が盲人を導くことはできぬ、と聖書にもある。」

小先生「先生も聖書を典拠にされるのですね。聖書の権威は偉大なものですね。」

大先生「学校教育によって押しつぶされた人々は無数と言ってよい。成績が悪いために辛い思いをした人々は数知れない。学校のおかげで無意味な涙が流れたのだ。」

小先生「相当センチメンタルですね。」

大先生「そうさ、ワシもいろいろな意味で被害者の一人だからな。」

小先生「坊主憎くけりゃ袈裟まで憎い。」

大先生「君、何か学校教育に替わる妙案はないものかね。」

小先生「たしかハーバート・リードが芸術による教育ということ唱えております。彼以外にも先人がいます。もちろん知育教育偏重を批判し情操教育を重視しているわけで、学校そのものを否定しているのではなかったと思います。」

大先生「それではコベルニクスの転回にはならないな。ワシは学校という温室栽培がいかんと言っておるのだ。学校では生きる喜びを教えるというよりも、ただ苦しみを味わわせていると言っても過言ではない。学校を中心に生活していると、人間は学校人間となってくる。」

小先生「先生御得意の造語ですね。学校人間が学校人間を造り出すという悪循環ですか。」

大先生「隣の国では学校人間という奇形を造らないための試みが行われている。生きた社会に触れることによって生きることを学ぶことなのだ。」

小先生「そうは言っても学校を廃止するわけにもいかず、困りましたね。」

大先生「ところで君は学校の中の空気が外部の生きた社会の空気とかなり違うことに気がつかないかね。」

小先生「ずいぶん暖かいような気がします。たぶん暖房のせいでしょう。」

大先生「どうもワシは酸素が少ないので

はないかと思う。何となく息苦しい。」

小先生「病院の空気は如何でしたか。」

大先生「それは君、実に厳しいものだよ。ワソの入院している間にも五、六人死んだよ。内科の患者だったが。」

小先生「病院には『生き死に』があるが、学校にはない。」

大先生「君も時には気のきいたことを言うね。入院するといろいろなことを学ぶよ。病院は一種の教育機関と言ってもよいだろう。医者と看護婦は別格だが、患者たちは誰が先生で誰が生徒というわけではな

く、お互いが教え合い励まし合う。」

小先生「目的が実際にはっきりしていますね。お互いの肉体と精神の健康を回復すること。」

大先生「そう、そうだよ、書物からは決して得られないことを学ぶのだ。生きた社会に接することは真の学問の始まりと言える。」

小先生「それじゃあ、さっそく私もスキーへ出かけ、骨折して入院することにします。」 (1976.2.1)

トロイアの女

高橋正俊

アテネ民主政の衆愚化現象を示すものとして、様々な事件が挙げられる。政治的に重要な事例は、ペロポネソス戦争においてアテネ側がやや不利になりかけ、頭に血が昇った時期に多発した。例えば、B. C. 428に起ったミュティレネの離反鎮圧の処理において典型的である。アテネ民会は、クレオンの煽動にのせられ、ミュティレネ市民は全員死刑・婦女子は奴隷とするとの決議をなしておきながら、一晩頭を冷やして考えてみて後悔し、翌日民会を開きなおしたのである。こんどは總健派が勝ちを制し、危い所で市民全員処刑という最悪の事態を回避できたのであった。¹⁾ これは、民主政にも抑制装置(権力分立・二院制等)がやはり必要であることを説明する時のマクラに使う話であるが、政治的に重要事件とは言えぬけれども、もっと酷い例がある。

すなわち、B. C. 416年メーロス島に起っ

た事件である。それは、アテネが中立の立場をとっていた小国メーロスに対し、自らの支配下に入る事を強要し、拒絶されるや攻撃をかけ城をおとし「逮捕されたメーロス人成年男子全員を死刑に処し、婦女子供らを奴隷にした」というのである²⁾。これを記した史家ツキディデスは、このようなアテネの行動の動機・根拠を空白のままに残している。先のミュティレネの場合は、従来の同盟者が謀叛を起こしたわけであるから、その処罰の当・不当は別として、根拠は明白である。しかるにメーロスの場合は、話は全く別である。アテネの言いぶんは、史家の述べる所によれば、強者の論理にかかっている。曰く、「この世で通ずる理屈によれば正義か否かは彼我の勢力伯仲のとき定めがつくもの。強者と弱者の間では、強きがいかに大をなし得、弱きがいかに小なる譲歩をもって脱し得るか、その可

能性しか問題となり得ないのだ』³⁾。

国際関係の緊張時においては、味方に非ざる者は敵とする考えが強くあらわれる事があり、特にそれが小・中国に対する強国の態度である事、古今を問わぬのであろうか。実質的根拠を探るのはもちろん歴史家の任務に属しよう。ここで私の興味を引くのは、この事件に触発されてエウリピデスが書いた「トロイアの女」である。劇作家のこの事件に対する、更には戦いの悲惨に対する弾劾が、優れた角度から浮彫にされているからである。トロイアは落城し、男子はことごとく殺され、婦女子はヘカベー、カサンドラをふくめてみな奴隷とされる。カサンドラは狂って、自らとアガメムノンをはじめとする全ギリシア軍の運命の暗澹を予言する。ヘクトールの忘れがたみたる幼児が城壁より投げ殺され、トロイア

の全希望は去り、城の炎上を背に女達はギリシヤ人の舟に引きたてられる。「ふるえる足をふみしめて／進むわれらの行手は、／あわれ、悲しい隷属の日々。」⁴⁾

この劇が「単なる芸術作品というよりも、予言の書」⁵⁾と言われたのは、アテネのシケリア大遠征とその大敗北、そしてスパルタへの全面降服が遠からずやって来た為であった。この作品にアテネ人は二等賞を与えたが、その心はどうであったのであろうか。

- 1) ツキディデス、「戦史」Ⅲ 1~49
- 2) 同 V 84~116
- 3) 同 V 89
- 4) エウリピデス、「トロイアの女」1328~30
- 5) G. murray, Euripides and his age
(Oxford University Press, 1946) p 83